



社会科見学

潜入! 東北大病院周産母子センター ナースステーション

母子の命支える 出産の現場

ナースステーションって、どんなところ? 訪ねたのは、東北大病院の「周産母子センター」。出産と育児をケアし、母親と赤ちゃんの命を支える看護スタッフの仕事の現場を取材した。

患者に寄り添い見守る

素早い連携が勝負

東北大病院の周産母子センターは、全国にある「総合周産期母子医療センター」の一つ。出産前後の母親と赤ちゃんをケアする「産科」部門と、超低体重だったり高度な治療が必要だったりする新生児のための「新生児集中治療室(NICU)」の2部門を備えている。年間約1000件の出産を扱い、救急搬送されてきた妊婦と胎児、新生児、出産直後の女性らの治療にも当たっている。安定しているように

見えていた入院患者の容態が急変し、緊急手術が必要になることもある。麻酔医がスタンバイし、手術室の準備が整えられるのに数分。産婦人科、小児科など関係する各科から医師が素早く駆け付け、あらゆる職種の医療スタッフが連携し合い、病院内で母子の命を支えている。

44人が助産師資格

周産母子センターの産科ナースステーションを拠点に働く、産科の看護スタッフは50人。このうち44人が助産師の資格を持っている。助産師は帝王切開などの場合を除く正常出産を介助し、妊婦や産後の母親に育児、出産に関するさまざまな指導、助言とケアを行う。大桐さんは「妊娠、出産すれば誰でも自然に育児できるようにするわけではありません。周産母子センターに

出産して初めて赤ちゃんに触れるという人もいます。母親たちは入院から自宅に戻るまでの数日間、出産をねぎらわれ、祝福され、教えられ、苦しいときを乗り越えて、赤ちゃんの世話の仕方を覚えていきます」と説明する。「助産師や看護師は患者に寄り添う職業です。患者さんたちは悩みや不安、疲れ、痛みなど、家族にも見せないような本音をさらしてくれ、一番苦しいときを支え、導くのが私たちの仕事です(大桐さん)

おいて新生児は原則誕生直後から母親と同じ病室で過ごす。母親たちは出産直後から睡眠時間も削って授乳などの赤ちゃんの世話に当たるため、看護スタッフも「日勤」と「準夜勤」「深夜勤」の3交替による24時間体制で母子を見守り、寄り添い続ける。



周産母子センター東病棟にある産科のナースステーション



入院患者のためのベッドの準備



①カンファレンスで患者の看護について話し合う ②心優しく頼もしい産婦人科の医師たち ③ナースステーションでは点滴なども行う スタッフの「休憩室」



②



③



④



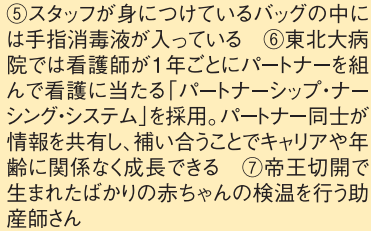
⑤



⑥



⑦



⑤スタッフが身につけているバッグの中には手指消毒液が入っている ⑥東北大病院では看護師が1年ごとにパートナーを組んで看護に当たる「パートナーシップ・ナースング・システム」を採用。パートナー同士が情報を共有し、補い合うことでキャリアや年齢に関係なく成長できる ⑦帝王切開で生まれたばかりの赤ちゃんの検温を行う助産師さん

休憩室に潜入! ナースも歯が命?



歯磨き中の看護スタッフ

看護スタッフの休憩室を訪問。歯磨き中のスタッフと目が合った。ナースも歯が命なの? 「皆よく歯を磨いていますね。出勤してまず1回、食事の後に1回、勤務中に2回は磨いていると思います。人と接する仕事なので、口の状態に気を遣っているのでしょうね」と大桐さん。

なかなか現場を離れられないため、食堂などに出掛けることはめったにない。食事はそれぞれ自宅で作ったり、購入したりした弁当派がほとんど。集中力が要るためか、血糖値を上げようとあめをよく食べるスタッフも多いそうだ。

大学の施設である周産母子センターは、医学部学生や看護学生、助産師学生らの教育の場でもある。学生たちは実習を通して、現場の経験を重ねる。大桐さんは助産師や看護師の適性について「こうでなければいけない、というわけではない。ありませんが『人が好き』『人を喜ばせたい』という気持ちがある人は現場で頑張れるようです」と語る。「人の気持ちに寄り添おうとしているかどうかは、患者さんにも伝わる。『この人なら何でも相談できる』と信頼してもらえるようになることが大切で